ブラウニングの「縁日広場のフィフィネ」にあらわれた人間の煩悩と涅槃について

三谷　正

(一) まえがき
(二) 有機的構成か挿話的構成か
(三) 写実的筆致と比喩的手法
(四) ドン・ジャンのフィフィネへの迷いとエルヴィレへの愛
(五) ブラウニングの霊肉の両面性
(六) 人間の煩悩と涅槃

(一) まえがき

ロバート・ブラウニング〈Robert Browning〉の「縁日広場のフィフィネ」〈Fifine at the Fair〉は、かれが熱愛した妻エリザベス〈Elizabeth Barrett Browning〉の死後ものされたものである。かれはただ独り浮世に残された淋しさ①のあまり、社交界のホステス〈Society Hostess〉のアシュバートン〈Lady Ashburton〉夫人に関心を持ち、かの女に求婚し、それを拒絶されるという事件があった。それが社交界に、夫婦生活についての夫の妻に対する誠実性が問題となり、かれは世間の噂の種となった。この噂に答える意味で、自らをドン・ジャン〈Don Juan〉、妻エリザベスをドン・ジャンの妻エルヴィル〈Elvire〉、アシュバート夫人を踊り子フィフィネ〈Fifine〉と、それぞれに隠

れ蓑を着せてこの詩に登場させ、自らの心情を述べたと推察されている。[2] それでこの詩について、あるものは“Perplexing Cynicism”[3]と言い、あるものは“Self-reproach”[4]の念を粉飾してものされた詩であるとしている。またオア夫人〈Mrs. Sutherland Orr〉の如きは「『縁日広場のフィフィネ』は浮気或は色事実験の権利を弁護するものである」[5]とまで言っている。これらの説のように、この詩を道徳的見地からのみで批評することには、わたくしは抵抗を感じるのである。人間には二重性即ち天上的と地上的、霊的と肉的の性格がある。そして天上界とか、霊界とかは想像の世界或は観念の世界であるに反し、地上的人間、肉体的人間は極めて実存的なものである。従って生身の人間の心の奥底には常に煩悩がうずくまり、時機あらば心の外に現われようとするものである。けれども亦、かかる人間も死に直面するとき、煩悩を超えて涅槃の境地に達するとも言われている。故に人間は煩悩の奴に堕することがあっても亦、涅槃の境地にもはいり得るが、しかし常住涅槃の境地にある絶対者に比するとき、人間は常に煩悩に苦しむ極めて哀れむべき弱小の存在というべきである。ブラウニングはこの弱い人間の姿をこの詩で歌ったのである。

(二) 有機的構成か挿話的構成か

ブラウニングはこの劇的独白詩の表題“Fifine at the Fair”のモトー〈Motto〉として、フランスの喜劇作家モリエール〈Moriere〉の「ドン・ジャン」の中から主人公ドン・ジャンとその妻エルヴィレの次の対話[6]を引用している。妻エルヴィレが

「あなた、このいとも不思議な神秘を筋道たててあかす力を与えて下さい」[7]

と言う。これに対しドン・ジャンは

「君が必要とあらば、その真相をあかさにゃなるまい。要するに……」[8]

と答え不思議な神秘の真相をあかすと言いながらも「要するに……」とあとの言葉が続かないほど驚き、元気なく眉を顰め、守勢的態度をとるのである。これを見て妻は更に、

「夫婦の愛情はその気さえあれば、いつまでも続くものと思われます。あなたの他の女に対する一切の感情を力弱くさせるほどの情熱で、あなたはわたくしを昔と同じく今も愛して下さることはできるはずです。お互の呼吸が止まり、愛着も止もり、死に到る時以外は、他の女の

いかなる感情もわたくし達二人を引き離すことはできないはずです[9]」

と言う。この夫婦の対話は、妻エルヴィレが、夫と夫婦の契りによって堅く結ばれているにかかわらず、夫が縁日広場の踊り子フィフィネに深い関心をもつ不思議について説明を求めていることを示している。そして今、その理由を夫が、妻の求めるままに説明するのが "Fifine at the Fair" と題するこの詩の内容であることを予示するのがこのモトーであると解せられる。次に、この詩は、更に、序詩〈Prologue〉をこのモトーと本詩の間に置き、本詩の主旨の説明をなし、且つ本詩のあとに跋詩〈Epilogue〉もつけ、本詩の結末の説明をしている。序詩、本詩、跋詩の三つから成るところをみると、この独白詩全体は劇詩構成上からの有機的構成〈Organic Plot〉と言えると思う。然るにこの序詩と跋詩について問題がある。序詩には "Amphibian" という副題がつき、跋詩には "The Householder" という副題がついている。今、もし序詩も跋詩もいづれも語り手をブラウニングとすれば、前者は(五)で述べるように、ブラウニングの妻エリザベスの死後に於けるブラウニングの生活心情を内容とした一つの抒情詩であり、後者も同じく(六)で述べるブラウニングの死の到来の際に於ける亡妻の霊に伴われての昇天を内容とした一つの抒情詩である[10]。そしてブラウニングが、この二つの抒情詩をこの劇的独白詩に挿入したとすれば、序詩と跋詩は、形式の上では、本詩とは直接の関係はなく間接的な関係に立つと言える。かく考えるとこの詩は挿話的構成〈Episodic Plot〉の劇的独白詩とも言える。とすればブラウニングがこの劇的独白詩全体の表題 "Fifine at the Fair" を再び本詩の表題としている理由が理解できるのである。然しながらこの詩に現われる人物はすべて(一)で述べたように隠れ蓑を着て登場する人物である。

従って内容的にみるときは、ドン・ジャンはブラウニング、エルヴィレはエリザベス夫人、フィフィネはアシュバート夫人と同一人物とみるべきであるが故に、序詩と跋詩の人物と本詩の人物は同一であるため、序詩及び跋詩と本詩とは直接の関係がある。例えば本詩の中の第六十四詩節〈Stanza〉及び第六十五詩節で、ドン・ジャンが海上に泳ぎ出し、天上を仰ぎ空想に耽る姿が描かれているが、これは序詩の内容と一致するものである。その他にも序詩の敷延的な空想や思索が本詩に多く存在する。これを考えると、序詩は矢張り本詩の主旨を伝えるもの、跋詩は本詩の結末を説明するものと考えられ、たとえ形式的には挿話的構成と言えても、内容的には有機的構成となっている。しかもこの劇的独白詩全体がドン・ジャンの独白となっているところから、結局、この詩は有機的構成の劇的独白詩と言えるのである。

㈢　写実的筆致と比喩的手法

この詩の背景となっている場所はフランスのブリタニュー〈Brittany〉のロアール〈Loire〉州にある海水浴場として有名なポニック〈Pornic〉となっている。ブラウニングがこの地に滞在しているとき目撃したジプシー女から、この詩の中の女性フィフィネを創りあげたのである。ドン・ジャンが妻エルヴィレをポニックの縁日広場へ連れ行き、旅役者が曲芸を演じる見世物に案内することから話は初まる。ドン・ジャンはジプシーの放浪生活の魅力、特にその旅役者一座の踊り子フィフィネの魅力について詳説する。エルヴィレはそれを夫の浮気と解し、困った顔付をするため、弁解にこれ努めるのである。しかし結果はフィフィネの称賛に終るのである。われわれがこの詩を読んで、先づ最も強く引きつけられるのは、ブラウニング独特の克明な写実的筆致と巧妙な比喩的手法である。前者についてはこの詩の初めにでてくるジプシーの生活、慣習の絵画的描写が特にすぐれている。ジプシーがその屯にこっそりやって来、そこに荒削りの丸太棒を人の知らぬうちに蓄積し、一夜明けると、その蓄積を蝶の群がる台のような美しさに変え、また、単に棒杭だけの足場であったところを満開の花床のように変容させ、更には地味で薄汚ない幌馬車を華麗な縁日広場のチューリップの花の女王[11]〈Queen-tulip of the Fair〉とするなど、放浪のジプシーの変幻自在な、しかも屈託のない生活を実に綿密に描写している。この克明な写実的筆致に比喩的手法が加わるとブラウニングの力量が倍加されるのである。その例が、無一物のジプシーが華やかな掛小屋を作る祕訣を述べる次の句である。

「諺に言う。飢餓が狼のような生物を森から誘き出すとき、
　鳥は他のいかなる生物よりも一層素早く好きなものを見付けてそれに突進する。どんなつまらぬものも鳥にとっては宝である。
　鳥はそれを引っ摑み、嘴で荒野に運び去り、おー、なんとゆっくりと楽しむことか。また人間が木に登り捕える鳥の巣は決して木の枝や葉では作られてはいない。
　尤も人の話しによくでるが、しかも滅多にその姿は見られない、また、その声も聞かれない渡り鳥のことなんだが。
　その巣の組織を一つ一つ切り開いて見よ。山間の産物とも言えるその巣の中に絡むものは、
　羊毛、羽毛、薊の毛、ひげのある毛草、外国製の絹の断片、糸の縺れを解した紗絽、恐らく金欄も少し、毛皮らしきもの、吹管の綿毛など

である。

それらは人間からくすねとったものであり、都市からの贈物でもある。

それは鳥がしばしば、がらくたの寄せ集めの中に舞い降り、掘り出しものを引っ摑み、こっそりとわれわれのところにやって来て、廃物の中の自らの楽園をいかに富ますかを示すのである。この方法、これが祕訣であり、ここに人の心を刺す神祕がある[12]」

と。ジプシーは世人からは卑しめられるも、却って一般世人の因襲に染まず、屈託のない生活を楽しむことを示す巧みな比喩である。ジプシーは世の称賛とか非難を超越し、自らの価値判断で生活する。人が見逃し、忘れたもの、時には戸口に掃き出されたものを拾い、それを利用してかれらなりの楽しい生活をする。人の捨てたがらくた品の拾いものを恰も真珠のように大切にする。また、森や荒野に野宿し、険悪な荒模様の天候の日は垣根に屯(たむろ)し、仲間同志雑魚寝(ざこね)をし、誰にも憚(はばか)ることがない。要するに何一つ所有物のないジプシーが人の捨てたがらくた品から華やかな掛小屋、かれらの集団の楽園を作るのである。このジプシーの生活風景を渡鳥及びその憩(いこ)いの巣さながらに描くブラウニングの比喩の巧みさとその表現の綿密な筆致はただ驚嘆あるのみである。またジプシーは一面では変幻自在な屈託のない生活をしながらも、他面では流浪の苦難と浮世の苦悩も深いのである。従ってその苦難と苦悩からの解放を求めることも切なるものがある。この解放への切望、即ち自由への憧憬のジプシーの心を描いた次の句も比喩的手法として妙(たえ)である。

「一夜明けた朝には更に大いなる期待がもてる。
　木と木の間、尖塔の下の高台に、
　天幕が張られ、索で釣り上げられた風通しのよい興行の建物が出現する。
　その建物の丸屋根の槍旗は、
　かれらの故郷、遥か彼方の家郷、
　喜びの住む遠き国、
　いついかなるときも、かれらを浮世から救いあげ、
　浮世の悩みを癒やしくれる懐かしの国に向って、

熱狂的に、自由を求め、真赤な布がピンと強く張って激しくはためいている[13]」

と。槍旗のはためく姿をジプシーの自由を求める心の象徴として把えたものである。

(四) ドン・ジャンのフィフィネへの迷いとエルヴィレへの愛

ドン・ジャンの妻エルヴィレは既に述べたように隠れ蓑を着たブラウニング夫人の分身として創り上げられている。従って聖女型〈Spiritual type of womanhood〉となっている。このためドン・ジャンはジプシーの屈託のない生活を窃かに憧れ、窮屈な夫婦生活からの解放を望む気持が心の奥底にあり、またジプシーの激しく自由を求める心にも共鳴していたのであった。そこでかれは妻を連れてジプシーの見世物のある縁日広場に行き、妻に目の当たりにジプシーの生活を見せるのである。そのとき興行小屋の丸屋根にはためく槍旗を指して次のように言う。

「何とジプシーの狂わんばかりに自由を求めることか。
おわかりか、わたくしのこの胸のうちにも、かっと鼓動するもののあることが、槍旗の興奮を繰返す何かがあることが。
わたくしの心臓も槍旗と同じく熱狂的にピンと張り、世の理不尽に対し、かっと燃えあがる。
かれらジプシーの送る生活にわたくしも与かることを求めている。
かれらは価値なき世間の屑ものと思われてはいる。
しかしかれらは自分の思う通りのやりかたで暮らしている。
かれらを誉め称えよう。でなければ社会を罵る方がましである。
わたくし自身は社会の言い成りになり、社会の呼びかけに従い硬張った首の重荷で腰を曲げている[14]」

と。ドン・ジャンは世の理不尽、社会のジプシーに対する重圧を鋭く非難する体裁によって、実はエルヴィレとの窮屈な生活を暗に非難しているのである。ここに「社会」というのは妻を指しているのであり、この句の終りの「わたくし自身は社会の言い成りになり、社会の呼びかけに従い硬張った首の重荷で腰を曲げている」は妻の自らへの重圧を示しているのである。そしてこの言葉のすぐ前にある「かれらを誉め称えよう」の言葉通りに、この縁日広場の旅役者のジプシーを種々誉めあげ、特に一座の女王的存在のフィフィネの美点を詳細に説明する。そしてそ

の説明の終りに、

「胸の脹らみと共に少女時代は終り、
男性さながら小姓の服を身に纏い、
思う存分お転婆振りを発揮している。
ぴかぴか光る金具をつけたお臀を日光に照らし、足取り軽く、こちらへ歩き、
半ばは淡白、半ばは猛しいポーズして、
わたくしたちを真面に見ている[15]」

とフィフィネの強壮な肉体美を卒直に感嘆する。するとエルヴィレは、卒直にこれを認めないばかりか寧ろ渋面を作るのである。ドン・ジャンは聖女型の妻との生活の窮屈さからの解放を切に望みはしていたが、他面では結婚以来、妻に対する敬愛の念は失ってはいなかったのである。そこでかれは妻の渋面に接するや弁解的に

「われわれは毒々しい液を避け、その誘惑にかからぬが賢明である。
われわれはただ、見詰め、称えるだけにするが思慮あるものと言える。
勿論それも用い方次第で正しい利用の方法もあろうけれど。
すべてのそれの熱愛者によって少しも不当に扱われず一層の賛辞を以って、摘み取り、正しい王座、それの当然あるべきところのわれわれの胸に置くべきは薔薇である。
あくどからず、あっさりとした甘い味わいのあるものの中から撰び出し、われら歯の間にて味わい、われらの舌の玩具とすべきは薔薇である。
華美の装いせる毒気激しい疫病の百合よ、汝の上にわれらの心臓は置かれない。
われらはやさしい雛菊を、乙女の菫を集めよう。
愛するはエルヴィレ、フィフィネにあらじとわれ思う[16]」

とフィフィネを東方の百合、エルヴィレを薔薇、雛菊、菫に譬え、東方の百合の花は、その花から湧出する営養のある薬味によって蜜蜂、蛾を誘惑するが、蜜蜂、蛾はその蜜のような液に陶酔の結果、その液に含まれる毒によって死ぬ。故にかれは百合よりも薔薇、雛菊、菫を愛すると言うのである。しかしエルヴィレは納得しない。夫はフィフィネの肉体的魅力に眩惑している。フィフィネは単に花火線香の光にすぎない。エルヴィレは太陽の光である。夫は太陽の光に浴しながら、それを忘れ、花火線香の遊びに興じていると一層の不満の色を見せる。これに対しドン・ジャンは言う。人が一年間切望の結果、大金を払ってラファエル〈Raphael〉の絵を購入し、一週間楽しくそれを眺め、その後にドレー〈Dore〉の絵本を一頁づつめくることに興味をもっとする。そのとき、もしラファエルの絵が、その人の移り気を非難するなら、その人は言うであろう。ラファエルの絵はかれの専有物である。その人のラファエルの絵への愛着は既にラファエルの絵への信愛と化している。そのため、その人はドレーの版画に熱中していても、もし家に火事でも起るならば、ラファエルの絵を救うためには生命をも投げ出すであろう。このラファエルの絵がエルヴィレであり、ドレーの絵本がフィフィネであると言う。しかし妻はそれを逃げ口上と思う。今、かりに、夫がラファエルの絵への愛着を持ちながら、たとえ一時的にせよ、ドレーの版画に関心を寄せるとすれば、それはやはり、夫が妻の太陽の光に浴しながら、花火線香の光にすぎないフィフィネの肉体に魅せられている証拠であると思うのである。そして極めて不服な素振りを示す。これを見てドン・ジャンは言う。

「わしは白状する。わしが敗けたのじゃ。
わしが女王と呼ぶかの女の勝利を認めて欲しいのだ。わしの求めるのはそれだけなのだ。
かの女は女性でもない。また男性でもない。無性の妖精なのだ。
恋の情熱といった血の気の溢れる女性でなく、無性の妖精なのである。
尤もいたづらっ子で、上品でないかもしれぬ。だが自由奔放で、花のように美しい。美貌を売って、法に触れることはせぬ。
自給自足の生活をしていて、親不孝もせぬ[17]」

と。フィフィネは一座の女王的存在ではあるが、恋の情熱に酔う女性ではない。強壮な体格をし、小姓の服を身に纏うも、決して男性ではない。寝ろ無性の妖精である。かの女は職業柄、裸体で舞台に現われるが、それを恥とせず、従って世人の侮辱にもよく堪え、却って自給自足の

精神に燃え、自らの演技に精進する。そしてそれによって生活の糧を得、老いたる両親を養い、獰猛な夫にも金を貢ぐ。かくフィフィネは親に孝行、夫に貞淑な感心な女であると力説し、かれのフィフィネへの関心は肉体的魅力ではなく、心の美しさのためであるというのである。しかしエルヴィレは夫のこの言葉に承服せず、寧ろフィフィネを卑しい踊り子、不潔な女となし、更に難渋の色を増す。ここでドン・ジャンは頭を絞り意味深長な言葉で言う。

「わしの確信にそなたも同調して欲しい。神によって創られたものは、いかに些細なものも、何かの点で、それの最高の価値を誇り得ないほど卑しくは創られていない。

運命の神の指図次第で、ある一瞬、与えられた使命を果し、栄光を得、世の勝利を味うこともできるのである。

磯辺に積み重った幾百万の砂のただ一粒が、幾世紀かを待つうちに、いつか一度は、その砂の表面を、日光が真面に差し、砂はその光の栄光を反射し、創造主の御名に於いて神に感謝を捧げ、一瞬、地上の最も燿かしいものとなり、万物の王座に跳び上ることもできるのである[18]」

と。人間には刻々に変化する虚偽の肉体の下に、永遠に不変な真実の心が隠されている[19]。即ちフィフィネの虚偽的肉体の下に、かの女の永遠に不変な真実の心が包まれている。故にフィフィネの肉体の下に潜んでいるかの女のこの最高の価値を見ることが大切である。フィフィネは譬えてみれば、海辺の一粒の砂にすぎない。けれども日の光に浴し、その栄光を反射し、その栄光を神に感謝し、たとえ一瞬でも万物の王座に上り得る女であると言うのである。ドン・ジャンがフィフィネの隠しもつ最高の価値を情熱的に力説するにかかわらず、かれのフィフィネへの関心を、妻は、フィフィネの心の清浄とか、隠しもつ最高の価値とかではなく、夫に情慾をかきたてるかの女の肉体に露骨にあらわれている煽情的魅力に外ならぬとの考えを変える様子は全く表われないのであった。けれどもドン・ジャンは尚も執拗に、半ば詭弁とも思われ、半ばは真理とも取れる思索的、哲学的な言葉を並べ、フィフィネへのかれの関心と妻に対するかれの愛との関係について自らの考えを披歴し、最後の説得に努めるのである。かれは言う。エルヴィレはかれにとっては貴重な妻であり、貴重な宝である。かれのこの貴重な宝を一層価値あらしめるには、かれはフィフィネに関心をもち、愛について、或は美について多くの知識を得、また、それらについて多くの経験を積むことによって、その宝の価値を増大することができる。エルヴィレの顔はかれの心の隙間をぴったり満たしている。そのことがなければ空虚に終るかれの心を隅

々まで満たし、それによってかの女自身の顔を完全なものにしている。しかしかの女は、かの女の鏡に向うとき、かの女の顔はそれほど完全であろうか。かれは決して完全とは思わない。[20] 然らばかの女の美しさは何処にあるのか。かの女の美しさはかれの心の中にある。すべて美はそれを感じる人の心の中にある。それは恋するものにあっても、芸術家の場合でも同様である。かれがかの女を妻として選んだのは、かれの心の完全は、かれの心の発展を助ける妻の心の中に求め得るとかれの心が知ったからである。それは丁度芸術家が大理石の石材の中に、かれの創り出そうとするものの姿を求めるように、また、恋するものが、その選んだ相手の心の中に、恋するもの自らの心の求める映像の具体化されているのを見るのと同様である。われわれの心が知見し、それを専有すること以外は、感覚の世界には真実の価値はあり得ない。端的に言って、価値の実現され得るものに価値を与え得るのは感覚でなくして観念である。心にとっては、すべて外面的なものの価値は、その心が外面的なものを、心の成長のための糧に変える心そのものの力に、全く比例するものである。心の焔は樹脂や香料[21]によって維持されるばかりでなく、藁や腐敗物[22]もその焔を燃やすことができる。もし心が、心の生命を支えるものを悪いもの[23]から抽出する力を保有するとすれば、灰が残される藁は問題とならない。故に心の勝利の根源は、悪いもの、不完全なものから善いものを呼び出す心の力である。彫刻家の弟子は大理石から直ちに傑作を呼び出すわけではない。かれはその師の彫刻家の創作にかかる彫像[24]の傍にあって、かれの手にしている石背[25]に自らの創り出そうとするものの姿を見出すのである。その弟子が遂に海の女神〈Eidothee〉[26]を呼び出すことができれば師匠[27]は感謝の念に満たされるのである。人間が他の人間を最も強く愛するということは一方の心が[28]、その心の蓄積せる宝を他の心に[29]賦与することを切望することである。そして粗野なものを美しいものに変えようとして、一方の心によって起こされた焔が、他の心の焔によって助けられることである。その各は他の不足を補い、遂に赤の、緑の、青の、黄色の不完全なものが、無色の透明な完全な光と溶かされ行くのである。心は心によって見分けられ、心は心によって呼び出されるのである。エルヴィレの心はドン・ジャンの心によって認められ、呼び出されるのであると。

(五) ブラウニングの霊肉の両面性

この詩の序詩は、勿論、形の上ではドン・ジャンが語り手となっているが(一)で述べたようにドン・ジャンはブラウニングの分身である故に、ブラウニングの言葉として、ここでは論を進めて行くこととする。ブラウニングは、言葉の意味からすれば全く反対の矛盾した言葉で、客観的

主観詩人とか、写実的浪漫主義の詩人とか、また、現実的理想主義の詩人とかとよく言われる。しかもブラウニング自身がこれを裏づけるかのように amphibian（両棲動物）という言葉をこの詩の序詩の副題として用い、自らの姿を述べている。ただの一語の副題としての amphibian の意味を正確に把握するにはこの詩の序詩全体を読む必要がある。さてブラウニングがこの詩をものす十一年前に、かれが情熱を傾けて愛した妻エリザベスが昇天し、かれとかの女は天上界（霊界）と下界（浮世）とに別れたのであった。かれは心身を燃やしてエリザベスを愛していただけに、その悲しみは極めて深く、一時はかの女のあとを追って自らも天国に行きたく思ったことは想像に難くない。けれどもかれには未だ人間的生命力が残されていた。かれに生命力が充分残されていたとしても、かの女に対する愛がなくなって行くということは勿論なかったのである。というのは、かの女が病身であり、しかも年上の姥桜であったにかかわらず灼熱的恋愛をしたかれであってみれば、幽明境を異にしても、かれのかの女に対する愛は消え去るにはあまりにも強かったのである。そこである日、突然一つの空想がかれの心に浮ぶのであった。その空想を綴ったのがこの詩の序詩である。[30] 先づ次のように歌う。

「今日、わたくしは海辺に立って、空想に耽った。
　暖い日で、水は澄み、波は笑い、海の恐怖など全くなく、入江を遠くまで泳ぎ出た。
　わたくしは波の上で横になり、太陽を仰ぎ見た。
　真昼の太陽がわたくしを見下(みおろ)していた。
　わたくしと太陽の間には、目にとまる生物は何一つもないのであった。
　そのとき、不思議な一羽の蝶が水面すれすれに、水に漂うわたくしの傍にやって来た。
　それは爽やかな、懐かしい蝶だった。
　その透き徹る翼は、極めて幅広く、一際(ひときわ)素晴らしく、その表一面に日の光を浴び、恰も魂そのもののようで、他の何ものでもなさそうであった」[31]

と。ブラウニングにとって、この蝶は亡き妻の幻に思えるのであった。かれはこの蝶の透き徹る翼に、在りし日のかの女の姿、病弱で青ざめてはいたが白く透き徹るしかも温い肌のかの女を感じたのであった。だが今は、この世になき、肉体のない魂だけの姿のかの女を見るにすぎなか

った。旺盛な生命力に溢れるブラウニングは妻に先き立たれ、一時は悲歎にくれるばかりであったが、やがてその悲歎を克服するため、その旺盛な生命力を二つの生活に向けたのである。即ちその後の生活を、本能的、物質的、享楽的生活の肉体生活と、理知的、思索的、創作的生活の精神生活との二つに向けた。そして前者の肉体的生活を陸上生活、後者の精神生活を水上生活とし、この二つの生活についてこの序詩で歌うのである。そしてこの二つの生活をする自らを amphibian とし、この序詩の副題としたのである。amphibian は陸と水の両方に棲む動物のことで、両棲動物と言えば簡単に聞える言葉であるが、ブラウニングは、これを肉体的生活と精神生活の二つの生活をする人間という意味に用いている。そしてこれを更に拡大した意味にも用い、人間の肉体的及び精神的の両生活を含めた人間の下界的生活と、また人間の別の面即ち人間が常に憧れてやまない天上的生活の両生活をする人間、言わば人間は肉と霊との両生活をする人間であるという意味にも用いているのである。そしてこのことをこの序詩で詳しく歌って行くのである。先づ次の句を読んでみよう。

「頭上の手の幅ほどの空の範囲はわたくしのもの、他のすべての空は蝶のものだった。
そしてその蝶とわたくし以外には誰もいなかった。
しかしわたくしは蝶の手をとり、共に飛ぶということはできなかった。
水を離れ、空に身体(からだ)を浮き上らせて、飛翔することなど到底できるはずもなかった。
反対に、もし蝶が水に触れれば、蝶も亦、お陀仏ということだった。
死神が、すぐそこに待ち伏せしていることは間違いなかったからだ」[32]

と。ブラウニングは蝶を見ても、水を離れてそれに触れることができなかったので、ただ水上を泳ぐだけであった。即ち亡妻の幻を見てもそれを追い、霊界に行くことはできなかった。反対に蝶も水に触れることができなかった。即ち蝶の姿の霊界の亡妻エリザベスも浮世に帰り得なかったのである。そこでブラウニングは、せめて霊界の妻に、聞く耳あらば聞いて欲しい、見る目あらば見て欲しいとの思いで水上に浮んでいるのであった。この水上に浮ぶということは、詩作に託して自らの思いをかの女に伝えることであった。更に次の句を読んでみよう。

「この世のものならぬ翼もてる蝶(肉体を伴わぬ翼だけの亡妻の霊)わたくしが束縛(水、従って肉体)を抜け出そうと躍起に手足を動かす無器用な姿を見て、吹き出しながらも悦に入っているのではなかろうか。

ひとたびは下界の生活を選んだわたくしにも（妻の昇天と共に自らもそのあとを追いたくは思ったがそれもなしかね、浮世に残る決心をしたこと）、かの女の空の生活は、いともかの女に相応しいと嬉しさとみに増すのであった。この言葉、わたくしならで誰に言い得よう。

かの女の魂、夙に肉体の衣を脱ぎ昇天し、今、天上のすべてをおのが住居とし、下界を見下し、わたくしを見守ってくれるのではなかろうか。

わたくしが翼を広げず、天上に飛翔せず、尚も浮世に止まり、浮世を楽しみ、虫けらのように眠る姿を見守りくれるのではなかろうか。

また、ときどき、天気晴朗の日、温かい波が、わたくしに、その束縛（陸上生活、従って肉体の束縛）を離れ、浮世の騒擾、浮世の埃を抜け出すようにと誘うことがある。

ああ、そのときでさえ、わたくしは飛ぶことができない故に、思想と感情（水上生活、従って精神生活）の溢れる水上にあって、ただ泳ぐのみなのだ」[34]

（ただ思索と詩作の生活をするのみだとの意）

と。浮世のかれが天上を憧れ、かの女を懐かしく思うのを亡き妻は天上から見下し、満足していると想像し、一方、かれは妻の天上生活はかの女に相応わしいと思えば嬉しく感ぜられるのであった。この嬉しい感じは、かれならで他の誰が口にし得ようかと、在りし日の妻の、心身共に罌粟の花の如く美しかった姿を回想するのであった。しかしかれとしては、浮世の埃を逃れて天上に来るようにと誘われても、飛翔し得ない事実には変りがない故に、ただ水上を泳ぐしか道がないと失望に追い込まれるのであった。けれどもかれは言うのであった。

「しかしせめて感情と思索を以って束縛を解放し、海を空の代用としよう。

一応は海を天上の代りの詩の世界としよう。

天がある種の霊を与えるように、海が事実上、肉体に昼間の息抜きを与える詩の世界としよう」[35]

と。ブラウニングは詩の世界、文学の世界こそ肉体の束縛をもちながら、亡妻との霊交の得られる唯一の世界であると思うのであった。しかしもともと人間は陸に住むもので、水の生活は永く続かないものである。即ちブラウニングも四六時中詩作の世界にのみ止ることのできない人間であった。そこでかれは言うのである。

「やがて彼方の一条の線が水平線の辺と会うところ、

あれは、われわれが疲れを覚えるとき或は、大波を恐れるとき、われわれの求める陸である。
われわれの歓迎するがっちりとして無事な陸である。――正直のところ
われわれはそこへ這い上ると、身体を擦り着物を着るのだ[36]」

と。肉体を脱することを得ない人間、しかもその人間の中でも人一倍人間臭い人間ブラウニングの本音を吐き、天上の亡妻を省みて、

「天上を飛翔するまねをし、下界の海を泳ぎ廻り、しかもいつも陸上にその姿を現わすわたくしを見て、かの女はわたくしを憐れみ、訝るのではなかろうか[37]」

と。天上に翔け上りたい気持はやまやまでありながら、肉体をもつ人間として、それもならず、せめて天上に近いと思える海を泳ぎ廻り、詩歌にこと寄せて、かの女に思いを寄せるも、それにもやがて疲れ、結局、陸に帰り、いつもの享楽生活をする下界のブラウニングを天上から見下す亡妻エリザベスはかれを憐み訝るのではなかろうかと言うのである。[38] 自らが土臭い陸の男、人間臭い下界の男なるにかかわらず、尚天上界に望みをかけるブラウニング、下界と天上、肉と霊の両世界に行きつもどりつする人間ブラウニングの姿をあらわすには amphibian の言葉は、全く打ってつけの表現ではないか。この意味で、ブラウニングは広い意味での霊肉の amphibian であったわけである。

(六) 人間の煩悩と涅槃

ブラウニングは夫人の死後、自らの生命力の捌口を陸上生活即ち肉体的享楽に求めはした。しかし全然夫人を忘れ去ったのではなかった。即ちかれは陸上生活(肉体的享楽)に沈淪するのでなく、水上生活(精神生活)によって、生身の人間として霊界に行くことを得ない代わりとして、せめてそれに最も近い水上生活従って創作生活によって夫人への思いのたけを表現しようとしたのであった。この詩もその創作生活の具体化の一つであった。そして亡妻に聞く耳あらば聞いて欲しい、見る目あらば見て欲しいとの希いはやまやまではあったが、霊界にある夫人には下界的、生身の耳も目もあるはずはなく、ここにブラウニング夫人の分身として、下界的耳と目をもつ現実の人間エルヴィレを創り出し、これに話しかけ、自らの思いを述べたのである。故にドン・ジャンがエルヴィレに多少詭弁的ではあるにしても、高邁な思索的、哲学的な理想主義的夫婦愛を説いたのは、実はブラウニングの亡妻への思いのたけであり、深い愛の告白であった。ドン・ジャンがフィフィネの肉体的魅力に圧倒されながら

もエルヴィレの精神的魅力にひきつけられているのは、ブラウニングがアシュバート夫人に多少心を寄せたものの、霊界のエリザベス夫人への懐思の篤きを暗示したものである。ここにブラウニングの陸上生活、従って享楽生活をドン・ジャンのフィフィネへの関心、また、ブラウニングの水上生活、従って精神生活即ち創作生活をドン・ジャンのエルヴィレへの理想主義的愛という思索的哲学的論述の、二つの面はブラウニングとドン・ジャンの両面的性格を表現したものと言えるのである。

かくしてドン・ジャンが哲学的、理想主義的深遠な種々の思索を披歴し、エルヴィレへの愛を力説するのであったが、遂にこれに飽きを覚え、共に家に帰るのであった。家に到着すると間もなくフィフィネから一通の手紙が来る。その手紙はドン・ジャンがフィフィネに支払うべき銀貨を金貨と間違えたという内容の手紙であった。ドン・ジャンとしては、必要以上を払っているため出向く必要はなかったのである。然るに、また、フィフィネの魅力がかれの身内に疼きだし、手紙を口実に

「五分間もあれば用を済ますに足りる。

わしは、今、外出はするが、すぐ引き返えす。わしを信じてもらいたい。

もしわしが約束を違えることがあれば、肉体を脱して幽霊となって再び浮世に現われ来たまえ」[39]

と捨て台詞を残して家をあとにし、再びフィフィネのもとへ飛んで行く。この点、ブラウニングが水上生活に飽き、陸上に帰り、陸上生活こそ最上の生活であり、最も望む処であると告白するのと一致するのである。偉大なブラウニングも生身の人間としては、人間臭い下界の男、土臭い陸の男であることをドン・ジャンの姿によって表現し、人間はすべて煩悩の奴となることも免れ得ないことを示したのである。しかしかかる人間も歓楽極まれば哀愁を覚えると言われる通り、また煩悩から離れて行くものである。ドン・ジャンがフィフィネと別れて帰ってみると、約束の時間が過ぎていたため、エルヴィレの姿はなかった。そこでかれは唯独り淋しく家の中で坐り込み、煩悩の罪に思いを巡らし、哀愁に閉ざされるのである。そこへ妻は幽霊の姿で帰って来る。ドン・ジャンは言う。

「ほんとうにお前は、また、浮世に帰って来たのか[40]」

と。妻は答える。

「再び帰りましたよ。どんな姿で帰ると思われましたの[41]」

と。ドン・ジャンは言う。

「もう心配することはない。この古るぼけた家から出て行こう。ぼろぼろと崩れ落ちる煉瓦は罪と恥辱で薄黒く汚されている」[42]

と。かくしてドン・ジャンは妻と話し合って、罪に汚された古い家を去って行くことに決め、去るに当って、近所の金棒引きに、

「愛がすべて、死は無[43]」

と書き残して出て行くのである。これがまた、ブラウニングが死に直面するであろうとき、エリザベス夫人が、汚れた浮世から清い天国へと、夫を迎えに下界に来り、二人の愛がすべてであり、死を知らぬ永生の天上に向う姿を暗示しているのである。[44]

かくしてブラウニングも、その分身のドン・ジャンも煩悩を去って涅槃の世界に入って行くのである。これはただにブラウニング及びドン・ジャンのみでなく、人間はすべて霊肉の amphibian として煩悩の奴となるが、またその最終に於いては涅槃の境地に入り得ることを示すものである。ただし絶対者が常住涅槃の世界にあるに比すれば、煩悩にその生涯の間悩む人間は弱小の存在というべきである。ブラウニングは人間のこの哀れむべき姿を描き出したのがこの劇的独白詩である。

〔I〕註

① ブラウニングが Fifine をこの詩の登場人物として創り上げたことについて, J. M. Cohen は次のように言っている。"Yet even as she is copied from a gipsy seen at a Freneh fair, she does not fail to betray her singular fascination for *the lonely widower* who created her" J. M. Cohen; Robert Browning, p. 137, ll. 21—24

② J. M. Cohen の次の言葉を参照のこと。

ⓐ "The poem is the direct outcome of his experience with Lady Ashburton" ibid., p. 137, ll. 13—14

ⓑ "The intention of the poem, Browning told Dr. Furnivall, 'was to show merely how a Don Juan might justly himself, partly by truth, somewhat by sophistry.'……In justifying himself to *his shadowy wife*——*or conscience*——*Elvire*, for his pursuit of the gipsy girl, the husband talks of some necessary knowledge that can only be gained from the other sex." ibid., p. 137, ll. 24—33

③ 妻への不実の噂に困って冷笑的に書いたこと。

④ 自責に苛まれて書いたこと。

⑤ Mrs. Orr: Handbook to Browning's Works, p. 150

⑥ これはブラウニング自身の英訳である。

⑦ モトーの英文第一節

⑧ モトーの英文第二節

⑨ モトーの英文第三節

⑩ W. L. Phelps は跋詩の "The Householder" を pure lyric（純粋抒情詩）として，ブラウニングが好んで用いる dramatic lyric（劇的抒情詩）と区別して，明瞭に一つの抒情詩と認め，次のように言っている。"It serves as an Epilogue, but it would be difficult and unprofitable to attempt to discover its connection with the poem to which is appended." W. L. Phelps: Browning, p. 88, ll. 5—7

⑪ Robert Browning: Fifine at the Fair の本詩の st. 4, l. 34

⑫ ibid., st. 9

⑬ ibid., st. 5

⑭ ibid., st. 6

⑮ ibid., st. 15, ll. 164—168

⑯ ibid., st. 8

⑰ ibid., st. 14, ll. 171—175

⑱ ibid., st. 29. ll. 339—350

⑲ 本詩の124詩節に次の言葉がある。"Truth inside, and outside, truth also; and between Each, falsehood that is change, as truth is permanence."
人間の内側に真実があり，（人間の心が神の心となれば，その心は真実であるとの意），人間の外側にも真実がある（人間の外側には創造主なる神が存在し，神は真実である意）。この二つの間に人間の肉体がある。人間の肉体の色香は変化するが故に信頼が置かれない。故に虚偽である。これに反し神の心を体得した人間の心は永遠に不変であるとの意味である。

⑳ エルヴィレに肉体的美しさのないこと。

㉑ エルヴィレを指す。

㉒ フィフィネを指す。

㉓ フィフィネを指す。

㉔ エルヴィレを指す。

㉕ フィフィネを指す。

㉖ ギリシャ神話中の Proteus の娘で海の女神である。そしてここでは価値ある美の表現されていることの意である。

㉗ ドン・ジャンを指す。

㉘ ドン・ジャンとして読むこと。

㉙ エルヴィレとして読むこと。

㉚ ㈡で触れた本詩の64詩節及び65詩節には，序詩と同じ水泳の描写があって，肉体と精神，虚偽と真実，天上と下界などの関係を海の水とその上方の空気との比喩を用いて説明している点は序詩の敷延的のものと考えられるので，両詩節を参照のこと。

㉛ 序詩の st. 1—4

㉜ ibid., st. 5—6

㉝ 引用句㉞を参照のこと。

㉞ 序詩の st. 7—12

㉟ ibid., st. 14—15

㊱ ibid., st. 17—18

㊲ ibid., st. 19

㊳ ここに関係して Orr 夫人は次のように言っている。
"So also will Elvire, thongh less dispassionately, watch the intellectual vagaries of her Don Juan, which embrace the heavens, but are always centred in earth." Mrs. Orr: Handbook to Browning's Works, p. 152, ll. 10—13

㊴ Robert Browning: Fifine at the Fair の本詩の st. 132, ll. 2352—2355

㊵ ibid.,: 跋詩の st. 1, l. 7

㊶ ibid., l. 8

㊷ ibid., st. 2, ll. 9—10

㊸ ibid., st. 4, l. 32

㊹ ⑩で示したように Phelps は "The Householder" を抒情詩として扱っているので，暗示どころか寧ろ明示的に次のように言っている。
"Browning calls it 'The Householder', and of course it represents in his own life the anticipated moment when the soul leaves its house to unite with its mate. Out of the Catastrophe of death appears a radiant vision which really seems too good to be true.
'What, and is it really you agein? quoth I:
I again, what else did you expect? quoth She'" W. L. Phelps: Browning, p. 88, ll. 12—19

〔II〕参考文献

① Edward Berdoe: The Browning Cydopaedia

② Mrs. Orr: A Handbook to the Works of Robert Browning

③ J. M. Cohen: Robert Browning

④ J. T. Nettleship: Essays and Thoughts of Robert Browning

⑤ Charlotte Porter and Helen A. Clarke: Prince Hohenstiel Schwangau, Fifine at the Fair, Pacchiarotto, Miscellaneous Poems by Roberr Browning